

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392900041		
法人名	株式会社 翔栄		
事業所名	グループホーム和鹿島		
所在地	熊本県八代郡水川町鹿野1301番地2		
自己評価作成日	平成30年10月24日	評価結果市町村受理日	平成31年1月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成30年11月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

共用型デイを併設しており、グループホームの入居者の1日の流れもデイ利用者と同じプログラムを実施、日中は多い時で12人の方が職員と一緒に共同生活を送っています。時には、ケンカがあったり、笑いが絶えないこともあったりとにぎやかなホームです。また、同敷地内に訪問看護ステーションがあり、入居者の健康管理に協力してもらっています。入居者の意思を尊重し、一人ひとりのペースで生活出来るように、『こころ寄り添う介護』を基本姿勢としてすべての出会いに感謝しながら日々のケアにあたっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所時に掲げた『こころ寄り添う』介護の基本姿勢は、家族にも浸透しアットホームな雰囲気の中で、本人の気持ちを第一に考えたケアを実践し、時には家族への寄り添いの言葉かけなどが安心と信頼に繋がっている。栄養面に加え、季節や入居者の好みを取り入れた手作りの食事支援は代表者自ら関わり、職員も同じものを摂ることで思いの共有や活力に繋がっている。玄関先やホーム内には職員が努めて季節の草花を飾っており、放つ香りも会話のきっかけになっている。重度化しても本人・家族の意向を尊重しながら、ホームに出来る支援に努めており、臥床中心になられても、音や匂い、笑い声が聞こえるようにすることで、和鹿島の一日を共に味わってもらえるようにしている。ホームは新幹線の走る様子やビニールハウスの野菜の成長など、身近な散歩で見る事が出来、今後も入居者の笑顔や笑い声を近隣・地域へ発信し、少しずつ浸透に繋がっていくことを期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者の</li> <li>利用者の2/3くらい</li> <li>利用者の1/3くらい</li> <li>ほとんど掴んでいない</li> </ol>	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての家族と</li> <li>家族の2/3くらいと</li> <li>家族の1/3くらいと</li> <li>ほとんどできていない</li> </ol>
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>毎日ある</li> <li>数日に1回程度ある</li> <li>たまにある</li> <li>ほとんどない</li> </ol>	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ毎日のように</li> <li>数日に1回程度</li> <li>たまに</li> <li>ほとんどない</li> </ol>
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者が</li> <li>利用者の2/3くらいが</li> <li>利用者の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>大いに増えている</li> <li>少しずつ増えている</li> <li>あまり増えていない</li> <li>全くいない</li> </ol>
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者が</li> <li>利用者の2/3くらいが</li> <li>利用者の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての職員が</li> <li>職員の2/3くらいが</li> <li>職員の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者が</li> <li>利用者の2/3くらいが</li> <li>利用者の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者が</li> <li>利用者の2/3くらいが</li> <li>利用者の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者が</li> <li>利用者の2/3くらいが</li> <li>利用者の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての家族等が</li> <li>家族等の2/3くらいが</li> <li>家族等の1/3くらいが</li> <li>ほとんどできていない</li> </ol>
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほぼ全ての利用者が</li> <li>利用者の2/3くらいが</li> <li>利用者の1/3くらいが</li> <li>ほとんどいない</li> </ol>			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護理念を実践につなげるよう努力しているが、スタッフの入れ替わりもあり、スタッフ間に理念の理解にバラツキが見られる。	開所時からの理念を一度見直し、現在の理念4項目をケアの指針としている。共用型デイを併設しており、3名の利用者が加わるとリビング内は更に賑やかになり、職員は「こころ寄り添う介護」を意識しながら、一人ひとりに関わるよう努力している。新たに入職した職員には、ホームの現状を伝えながら、理念について話をする時間を持っている。	理念と共にホームの基本姿勢ともいうべき、「すべての出会いに感謝し…」は、ホームに関わる全ての人たちとの繋がりを指しているが、ホームは当初からの課題である「地域に信頼される」という点ではまだまだ不十分だと感じている。運営推進会議の中でも地域交流を課題として話し合うなど取り組みの跡が見られることから、今後の進展に期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	社長や施設長は地域の一員として交流しているが、事業所自体が日常的に交流する機会はない。	ホームの運営者が当地域に住んでおり、集会や道路清掃などに積極的に参加しながら、ホームとのパイプ役を担っている。入居者は職員と共にビニールハウスが並ぶ周辺を散歩したり、新築住宅の上棟式でモチ拾い(しとぎ餅)を楽しむなど昔懐かしい習わしに参加している。	管理者は地域との繋がりが薄いと感じており、運営推進会議から地域情報を収集し、行事への参加を検討したり、地域資源を活用するなどの取り組みを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等で認知症の人の理解や支援の方法を伝えているが、地域の人々全体には出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	会議には行政関係者や地域の代表者ばかりでなく、グループホームや共用デイの家族代表が参加し、情報を共有する場としている。会議はリビングホールを会場としており、出席者は入居者の普段の様子や職員の関わりを目にしながら進められている。質疑応答の中で認知症の方への接し方や、緊急性が伴う身体拘束についてのやり取りが行われている。運営推進会議を町内全てのグループホームとの合同開催が出来ないかなど新たな提案も出され、有意義な会議となっている。	地元の代表者からは災害時における地域連携の必要性や、ホームの体制をしっかりと把握しておくことで、協力できることがあるとの発言があり、先ずは会議を利用して参加者との避難訓練を実施するのも良いと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加して頂き、実情や取り組みを積極的に伝え、協力関係を築くように取り組んでいる。	行政や包括担当者が毎回運営推進会議に同席しており、情報を共有し参加者からの質問等に応じてもらいながら、良好な関係を築いている。ホームを退所された後引き続き、共用型デイを利用されるなど家族の意向を汲み、行政と連携しながらホーム運営に反映させている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	代表者及び全ての職員が正しく理解し、身体拘束をしない様努力しているが、たまに『チョット待って』が聞かれる。	職員はホーム内の勉強会や、外部研修・グループホーム連絡協議会の情報を共有し、身体拘束や虐待についての認識を深め、それを行わないケアに努めることで一致している。管理者は職員のストレスケアについて、“一人でため込まない”ように希望休への対応や、職員同士のコミュニケーションを図るよう努めており、働きやすい職場環境を目指している。	運営推進会議を利用し、身体拘束への取り組みを発信している。他事業所での実例を通し、職員とのカンファレンス内容を紹介したり、参加者からの意見を聞くことでホームの在り方を再確認している。今後も「拘束ゼロ」への取り組みが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修会に参加したりカンファレンスで勉強したりして虐待がないように全員で注意を払いながら防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設内研修等で制度の理解はある程度できているが活用する対象者がいないので支援はできてない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関する事項は、施設長と管理者が行っており、十分な説明を行ない理解・納得を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月1回必ず家族に面会し、質問や利用者様の状況等を報告している。また、運営推進会議に家族代表で1名参加して頂き意見を頂き、運営に反映させている。	開所当初から入居者の利用料を家族が持参することで面会の機会とし、意見や要望を出してもらっ様投げかけている。遠方の家族の中にも月1度は来所され入居者の受診に付き添われており、入居者の現状や受診結果を共有しながら意見をもらっている。入居者の意見は日頃のやり取りの中から確認しているが、高齢化と共に自ら言える人が少なくなり、職員の推察によるところが多くなっている。	家族の意見を収集し、運営に反映させる手段として、ホーム独自のアンケートを実施することも検討いただきたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月15日にカンファレンスを開催し意見・提案を聞く機会を設け、早めの対応を検討し運営に反映させている。	毎月15日にはカンファレンスを開催し、入居者の現状を共有してホームの課題を検討している。重度化に伴い、介護用レンタルベッドを望む声に1台を導入し、入居者自身の身体と職員のケア負担の軽減につながっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修を受ける機会を確保し勤務として研修に参加できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会や研修参加において他所業所のスタッフとグループワーク等を通じて交流する機会をつくりサービスの質の向上に努めている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入時は特に集中して観察を行いスタッフ間の情報交換をおこないながら、馴染みの関係が築けるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の立場に立ち、困っていること、不安なこと、要望等を傾聴し、積極的にコミュニケーションを取るよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスを導入する段階で本人や家族等が持つ実情や不安や隠れた思いを受け止め、多方面の視野から支援できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様から教えて頂くことも多く、家族意識を持ち、一緒に笑い、喜びや楽しみを共有できる関係を築けるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	共に本人を支えていく関係を築けるよう家族と積極的にコミュニケーションをとるよう心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	希望があれば外出支援している。また、知り合いの方(馴染みの人)がこられた時は話し易い雰囲気をつくり、関係が途切れないよう支援に努めている。	地域資源を活用し、入居者に馴染みの神社で初もうでを行い、春先の川浴いを散歩しては懐かしいつくし採りを楽しんでいる。上棟式でのしとぎ餅を捨てるなど昔からの行事にも触れている。入居者のこれまでの暮らしぶりが反映できるよう食への関りや1番風呂への希望に応じているが、以前の様に畑作業ができる方がおられない様である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の性格や好み等を把握し、よい関係が保てるよう声かけしたり、寄り添ったりして支援に努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了しても訪ねる機会を持ち、必要があれば相談や支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握が出来ように努力中である。	以前自発的に話をされていた入居者の思いも聞き取りが難しくなり、職員は会話のやり取りや行動から推し量って判断することも多くなっている。家族の面会時には入居者の様子を伝えながら、思いを確認し、プラに反映するよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントシートに目を通したり、家族から話を聞き、個々の生活歴やサービス利用の経過等の把握を行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	現在の心身状態、有する能力等を把握できるようスタッフの間で情報交換している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	病状の変化、観察不足等で現状に即した介護計画ができてない。	入居者を担当する職員は、日頃の関りや会話から汲み取った思いをプランに繋ぐようにしている。夜間帯の排泄を心配する入居者が、トイレを気にせず熟睡するためのプランを家族と相談し、ポータブルトイレへの切り替えや、センサー使用についても不必要になった時点で使用を中止するなど、状態に応じた内容を盛り込んでいる。計画作成担当者は重度化が進む中でもできることで入居者の自信を引き出し、ホーム生活が楽しみなものとなるよう家族や職員意見を大事にしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	気づいた事は出来る限り記録として残しているが、それが活かせずケアの実践や介護計画の見直しに活かされてない。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	既存のサービスに捉われない柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいるがスタッフの意識統一が追いついてない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	季節ごとに外出し、初詣、花見、屋外での食事会等、外の空気を吸いながら暮らしを楽しめるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人及び家族の希望を大切にし納得が得られるかかりつけ医に変更するなど支援している。	かかりつけ医については、家族が往診や看取り支援に理解ある医師を望まれており、現在希望に応じて3か所の医療機関による往診を支援している。専門医の受診については、ホームでも柔軟に応じている。日々の健康管理は、看護職員が中心に行っており、バイタルチェックや表情、歩行、食欲など職員間で共有している。状態に変化があった場合は、事前に家族へ報告・相談を行ったうえで、受診が行われており、適切な医療支援は家族の安心や信頼にも繋がっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職、看護職の情報交換や共有に努め、受診支援や処置が受けられるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は出来る限り訪問し病院関係者と交流を持ち情報交換できるよう関係づくりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期のあり方について、事業所で出来る事を十分説明し方針を共有している。	入居時に重度化・終末期支援に関するホームの取組を説明し、その時点での意向を確認し、その後も状態に応じて話し合いの機会を持っている。この一年も、お一人の終末期支援が行われ、家族も、最期を看取られている。支援後は本人を偲びながら、振り返る時間を持っている。	往診と看取り支援に理解のあるかかりつけ医の存在は心強く、今後も日常の中でホームに出来る支援によって、入居者に最良の時間を継続いただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフの個人差もあるが全員が応急手当や初期対応の実践力を身につける様努力している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	熊本地震の際は消防団の応援で無事に避難することができた。火災に関しては年2回の避難訓練を実施している。	年2回火災を想定した訓練を実施している。職員は日頃からコンセントの埃のチェックも行うなど、意識を持って安全管理に臨んでいる。災害時の食備蓄としては、米や缶詰を確保している。自然災害のマニュアルは作成しているが、実際の訓練には至っていない。避難先の地図や道順などは、行政への報告を済ませている。	熊本地震発生では、地元消防団の応援に感謝しており、今後も普段からアドバイスを受ける事が出来る関係性の構築に期待したい。また、自然災害についても、風化する事のないよう、机上訓練を含めて対応を検討することが期待される。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない声かけや対応が来ている。	“こころ寄り添う”とする基本姿勢の下、無理強いしない事や止めない事など、入居者の気持ちを受け止めながら、日々のケアにあたっている。声掛けや誘導もその方の目線やスピードに合わせており、安心した表情でトイレ誘導を受ける入居者の姿があった。管理者は食事中的のエプロンの使用も尊厳や使い方は？など、当たり前にならない介護を語り、職員へ伝えている。個人情報の使用については、家族の承諾を得、職員の守秘義務についても代表者より周知徹底されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	様子を観察したり傾聴したりして、本人が思いや希望を表したり、自己決定ができるような声かけをするよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間等は本人のペースを大切に出来ているが、その他(排泄・入浴)はスタッフの都合になっていることもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔保持は出来ているがその人らしい身だしなみやおしゃれはできてない。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事はスタッフも一緒に食べており、可能な方には片付けのお手伝いをお願いしている。	開設当初から栄養面に加え、旬を活かした手作りの食事を提供し、職員も一緒に同じものを摂ることで思いを共有しながら楽しい食事支援に繋げている。献立は季節感や和食に限らず、スパゲッティやハンバーグなどの洋食の希望も多く、好みを取り入れており、調理は代表者と専任者が中心に行っている。入居者も下膳や味の評価など出来る事で関わってもらっている。芝生では、季節に応じてバーベキューやお茶の時間を楽しんでもり、入居者が戸外での食事を楽しんだことが写真からも確認された。。	食材購入に何か所も商店を回り、入居者に喜んでもらえる食事支援が継続されている。食事形態も様々であり、容易な事ではないが可能な限り変わらぬ食事支援に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態や能力、習慣に応じた食事形態にしている。また、こまめに水分補給の声かけをしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしているが、拒否もあり不十分になるときもある。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄状況、排泄パターンを把握し個別での対応に意識して、努力している。	把握した排泄パターンを職員間で共有し、日中はトイレでの排泄を基本に、自立の継続や個々に応じ支援している。布パンツや夜間のみオムツ、ポータブルトイレなど、昼夜の使い分けについてもケア会議で検討しており、家族の負担軽減にも繋がっている。トイレは入居者で使い慣れた場所があり、食後など使用が重なる場合は、空き具合を確認しながら誘導している。トイレやポータブルトイレも清潔を心掛け管理している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	こまめな水分補給や野菜を多く取り入れた献立にしたり、体操等に取り組んでいるが、便秘の予防になってない。下剤にて対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日や時間帯は決めているが汚染があった場合は曜日に関係なく支援している。季節感が味わえるように柚子湯等を定期的におこなっている。	現在、皮膚が乾燥される方が増えており、週2回の入浴を一番風呂や同性介助の希望など、可能な限り対応しながら支援している。汚染時はその都度シャワー浴により不快なく過ごせるようにしている。入浴は職員とマンツーマンになる機会であり、会話をしたり、見守りでよい方は一人でゆっくり入ってもらするなど、個々に応じて入浴を楽しめるようにしている。また、菖蒲や柚子湯も継続して取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活習慣やその時の状況に応じてしっかり眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解するよう努力している。薬の変更時は症状の変化の確認ができるよう情報交換している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	脳トレ、ラジオ体操、歌のレクリエーション、嚙下体操、洗濯物たたみ手伝い等の支援はしているが、一人ひとりに合わせた支援はできてない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	利用者の重度化に伴い、戸外に出かける機会が少ないが、季節行事としての外出支援は出来ている。	入居者の身体機能状況から、全員での外出の機会は少なくなっているが、庭先の散歩や車いすの方も近くの川沿いを散歩するなど、個別支援の充実に努めている。家族との外出としては、受診や家族の入所先の施設に面会に連れられるなど協力が得られている。今後も季節行事の外出に加え、職員の人員配置を見ながら、個別支援の外出に取り組みたいとしている。	ホームの玄関先からは新幹線の走る姿や、田畑に囲まれた環境であり、散歩や外気浴の機会を来訪時の家族にも呼び掛けながら進めていかれることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭は事務所で預かっており、本人の買い物希望があればいつでも使えるように準備している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	いつでも電話できるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間は季節の花を飾ったり、季節感がある掲示物をしたり居心地良く過ごせるように工夫している。	玄関には、プランターの花苗や置物を配置し来訪者を迎える他、入居者が外に出た際寛ぎの場となるようにしている。また、ホーム内にも壁面や職員の持ち寄った花は、季節感があり、入居者と職員の会話のきっかけにもなっている。訪問当日は干し柿の季節で、今年は室内に吊るされていたが、旨く仕上がる入居者の一言アドバイスが聞かれた。ホーム内は臭気もなく、台所からの調理の音や匂いが家庭に近い環境を作っていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室で横になって休憩したり、ソファで過ごしたり、テーブル席で気の合った利用者同士で過ごせるよう工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族に本人の使い慣れたものや好みのものを持ってきて頂くように声かけしている。	居室の環境作りについては、使い慣れた物や好みの品を持参して欲しいと伝えている。タンスなどの持ち込みは少なくなっているが、居室担当職員が中心になり、持参された家族の写真をはじめカレンダーや塗り絵などの作品を掲示し、安心できる環境を作っている。押入れも備わり、衣類や排泄用品なども収納できることから、比較的スッキリとした居室となっている。職員は日中の換気や寝具の日光干しも小まめに行い、気持ちよく安眠できるようにしている。	季節外の寝具や衣類などは職員がまとめ、可能な限り持ち帰りを依頼し、損傷の確認なども伝えている。今後も家族の協力を得ながら、居心地よく過ごせる環境に努めていきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの力を把握し利用されている場所は、大きな文字で表示して、できるだけ自立した生活が送れるよう工夫している。		